

[論 文]

フレーベル『母の歌と愛撫の歌』における味覚論

The Theory of Taste in Fröbel's *Mother Play and Nursery Songs*

石 村 華 代

Ishimura Kayo

はじめに

近年、食のグローバル化やファストフード化等の進展とともに、フランスやイタリアを発信源とする味覚教育への関心が高まっている。フランスの科学者・ワイン醸造学者であるピュイゼ (Puisais, J.) が1975年に小学校で味覚教育プログラムを実施して以降、フランスでは、食に関わる知識の獲得や適切な栄養摂取を目的とする従来型の食教育や栄養教育と、味わいの感覚や経験を基礎とし「食べる喜び」「共生」などを重視する味覚教育とを区別して捉えるようになってきている [石井ら 2016: 4-5]。また、イタリアでは1980年代後半に生まれたスローフード運動と連動しながら、味覚教育が推進されてきた [プラート味覚教育センター／中野 2012: 5]。日本でも仏伊からの影響を受け入れたり、日本の風土や文化に合わせたスタイルを追求したりしながら、現在、5つほどの団体が多様な教授法を開発している [上田 2021: 60-89]。これらの動きに共通しているのは、感覚を豊かに働かせながら「『どのような食べ手になりたいのか』と自ら不断に考えそれを実現できるような主体」 [上田 2021: 1] の育成という視点である。

一方、そのような実践の基盤となる理論的な研究は、まだ緒に就いたばかりである。味覚をテーマとする哲学的研究や思想史的研究は、国際的には盛んになりつつあるが、国内では本格的な研究がまだ見られない [上田 2021: 253]。味覚教育についても、そのような種類の研究はほとんど行われていない状況にある。

このような中、本稿では、幼稚園の創始者として知られるフレーベル (Fröbel, F.) の味覚論や味覚教育論に着目する。彼が晩年に執筆した家庭用育児書『母の歌と愛撫の歌』では、タイトルに「身体と四肢及び感覚の遊戯の歌」という言葉が添えられていることから分かるように¹、味覚を含む「感覚」は最も重要な概念の一つと考えられる。しかしながら、その思想を感覚教育の観点から捉えようとする試みは少ない。例えば、コンラート (Konrad, C.) は同書の現代的意義を「運動機能上の発達」「認知的な発達」「音楽的な発

¹ ただし、『全集』第5巻『母の歌と愛撫の歌』表題紙の日本語翻訳版 (左ページ) にはこの言葉があるが、ドイツ語版 (右ページ) にはそれが書かれていない。ドイツ語版は本論文が参照した版 (MK) と同一の内容であり、この版が使用された可能性もある (翻訳元の出典は『全集』には明記されていない)。なお、この言葉はMK1には掲載されていることは確認できた。『母の歌と愛撫の歌』初版本の表紙は、閲覧に制限があり確認することができなかった。

達」「情緒的な発達」「宗教的な発達」「象徴機能上の発達」の五つに分類し、「認知的な発達」の部分でわずかに感覚教育に言及しているが、その考察は断片的なものにとどまっている [Konrad 2006: 219-221]。また、教育思想史学会が編集した『教育思想事典』の「感覚」の項目でも、「感覚がそれ自体としての教育の対象に取り上げられるようになったのは、20世紀に入り、心身に障害にある人たちの個別の感覚のリハビリ、幼児期の感覚教育、モンテッソーリの感覚教具による教育、視聴覚教育等の必要が生じてからであった」 [斎藤 2017: 108] と説明され、フレーベルは取り上げられていない。

このような状況を踏まえ、本稿では、フレーベルがそれまで低級感覚として位置づけられてきた味覚や嗅覚も含めて²、あらゆる感覚を開発し洗練させることの重要性に着目していたことを示すとともに、彼の味覚（教育）観をその身体観や感覚観と関連づけながら明らかにしたい。

そのための論述の順序として、まず、『人間の教育』（1826年）における味覚論を概観する（第一章）。次に、『母の歌と愛撫の歌』（1844年）において身体、感覚一般及び視覚・聴覚・触覚がそれぞれどのように位置づけられているのかを追究する（第二章）。最後に、フレーベルが味覚及びそれに関わりの深い嗅覚も含めた感覚一般を開発することになぜ意義を見出したのかを明らかにしたい（第三章）。

1 『人間の教育』における味覚論

フレーベルの著として知られる『人間の教育』のうち、全体のおおよそ4分の3は、教授の段階である児童期に関する記述である。そこでは感覚への関心はさほど払われていないので、彼の感覚観に着目するためには、それ以前の乳幼児の段階について叙述された部分に目を向けなければならない。

フレーベルによれば、人間の使命とは「内なるものを外なるものにする、外なるものを内なるものにする」 [MK 32: 61] である。それに応じて、「それぞれの外的な事物もまた、認識されたいという、しかもその本質やその連関において承認されたいという要求をもって、人間に対して現れてくる」 [MK 32: 61]。そのような要求に応えるための道具となるのが、「感覚 (Sinn)」つまり「自動的に内的なものにする (selbsttätige Innerlich-Machtung)」である。すなわち、感覚は、外的な事物と内的なものとの媒介する手段としてたえず機能するものである。

ところで、外的な事物は、より固体的なもの・より液体的なもの・より気体的なものに分けられる。またそれは、より静止的な状態にあるか、より運動的な状態にあるかのいずれかとして現れる。フレーベルはこの部分ではほとんど説明を加えていないので、推測を働かせるしかないのだが、各感覚器官は表1のように分類されるはずである。

² 谷川渥はプラトンの『ヒippias (大)』の一節を引用しながら、「人間のもつ五つの感覚のうち、<美>と特権的に関連づけられた視聴二覚を『高級感覚』、<美>との関係をア・プリオリに拒否された触・嗅・味の三覚を『低級感覚』とする伝統は、すでにこうして始まっていた」と論じている [谷川 2003: 13]。

表1³

対象の運動	対象の様態	対応する器官
より静止的	より固体的	探る (tasten) 器官
より動的	より固体的	感じる (fühlen) 器官
より静止的	より液体的	味わう器官
より動的	より液体的	嗅ぐ器官
より静止的	より気体的	見る器官
より動的	より気体的	聞く器官

フレーベルによれば、あらゆる認識は、対立するものの結合や統合によって進展したり豊かになったりする。そして、人間の感覚的な発達においても、そのような認識のもつ法則は当てはまる。幼い子どもにとって初めに発達するのは聴覚であり、その後が続くのが、聴覚に刺激を受けて発達する視覚である。聴覚によって出会われる言葉と、視覚的に指し示されることによって出会われる事物がその子どもの直観において統合される時、そこには明晰な認識への萌芽が生まれるのである。このような視聴覚に関する記述の後、話題は四肢の使用へと転換しており、『人間の教育』の他の部分では直接的に味覚について言及している箇所はごくわずかである⁴。

ここではフレーベルが、味覚を液体的であると規定していること、それを嗅覚との組み合わせという枠組の中で捉えていることを、より詳しく見ていくことにする。まず、味覚の液体的性質については、アリストテレスの『魂について』でも「湿り気がなくては、何ものも味の感覚を生み出すことはない」[Aristoteles 2014: 110]と述べられているように、伝統的に指摘されてきた。つまり、味わわれる事物が口腔内で唾液と混合されることによって味いは生じるため、味覚は液体的だということになる。嗅覚も液体的なものに分類されているが、それは鼻腔内の湿り気のためか、あるいは口内にある湿り気を帯びた食べ物が口中香として嗅がれるからか、いずれかであろう。フレーベルは味覚と嗅覚に、共通する部分（液体的）と相対する部分（静止的／動的）を見出している。これらの感覚は先ほど挙げた視聴覚と同様に相互に影響を与え合って発達する、と彼は考えていたのだろう。このような発想は、次章以降で確認する『母の歌と愛撫の歌』でさらに深められることになる。

³ DUDEN独辞典第6版の例文では、「目の見えない人が杖で（地面を）探る」時にはtastenが、「脈を取る」時にはfühlenが使われている。よってtastenはより固体的／静的、fühlenはより固体的／動的な対象に関係する動詞だと解釈できる。また、音はたいてい空気の振動を伴うので、気体的／動的である。視覚は対象との距離を求め、それゆえ媒体を必要とするからか、気体的であるとされている。見られる対象が主に気体的なものであるとは考えにくいので、視覚の気体的性質は、対象そのものではなく媒体の様態に規定されていると考えられる。視覚は聴覚とは違って、静止的なものを対象としたり、あるいは、絵画のように動的なものを静止的なものとして捉えるプロセスに関わったりすることが多いため、より静止的とされるのだろう。

⁴ 他には、母親が子どもに食事の援助を行う際に話しかける方法について、フレーベルが言及している箇所がある。子どもが食事をする際には「お口を開けて」と指示し、言葉と行為を結び付けられるようにすべきだとか、子どもの口元にさじを近づけながら「坊や、おあがり」と言い、行為の目的を意識化させるべきだとか、食物と身体との関係に注意を促すために「まあ、おいしいこと」と言ってみせるべきだとか、彼はきわめて具体的な例示をしている [ME 41: 83]。この部分の記述には、後年の『母の歌と愛撫の歌』への発展の萌芽が見られる。また、フレーベルは、食事の内容については比較的細かく指示している [ME 37-39: 73-78]。その分析については [石村 2020: 41-42] を参照。

ただし、『人間の教育』におけるフレーベルの感覚論は、幼児教育への関心がまだ高まりを見せていなかったこともあって、まだ断片的である。また、感覚一般の統合性や各感覚の個別的性質についての考察も深められているとは言えない。むしろ、対立するものの統合という彼の中心理念へと沿わせるような形で、感覚の分析をしているようにも思われる。

2 『母の歌と愛撫の歌』における身体と感覚

『母の歌と愛撫の歌』は、フレーベルが母親と父親及びその幼子に向けて、その思想を分かりやすく示した挿絵付きの育児書である。この書は「母の歌と愛撫の歌」7編、「遊戯の歌」50編、「むすびの歌」1編の計58編から構成されている。本稿の主な目的はフレーベルの味覚観を明らかにすることであるが、その前に二つの準備作業をしておきたい。一つは、「遊戯の歌」第5編への導入として機能している「遊戯の歌」第4編の分析(2-1)であり、もう一つは、感覚一般及び個々の感覚様相——味覚とそれに関わりの深い嗅覚を除いたもの、つまり、視覚、聴覚、触覚——に関する見解の解明(2-2)である。

2-1 「食べる」という行為と身体——「遊戯の歌」第4編「おしまい」の分析

「遊戯の歌」第4編「おしまい」(図1)は、かつて存在していたものが今はもはやないという事態、つまり消滅⁵という現象を、子どもが口にするスープを例にして提示している。

もうおしまい ね おしまいです
 スープはもうおしまいです
 おやおやスープはどこへ行った
 お口がスープをのみました
 舌がスープを奥へやり
 のどがスープをのみこんで
 おなか (Mäglein) できれいにこなれました
 ひとつも歯でかみゃしないのに
 これで子どもはごきげんです

⁵ フレーベルは『幼稚園教育学』の中で、第一恩物であるボールで子どもと遊びながら、現存・消滅・再現という現象を子どもに示すよう促している [PK 39=82]。ボールの使用方を示した図の中では、1~24が現存、25「ボールがない」が消滅、26「ここにいた」が再現を表している [PK 584=95]。フレーベルは、遊びの媒体をボールに限定するのではなく、りんごやハンカチなどのボール以外のものにまで部分的に拡張してもよいと述べている [PK 39=82]。このような記述から、フレーベルは、他の媒体や方法を用いながら、現存・消滅・再現のような基本的な現象を繰り返し体験させることが大切だと考えていたことが分かる。第4編「おしまい」も、そのような他の媒体や方法の一つだと捉えられる。

なお、『母の歌と愛撫の歌』における四肢を用いた遊びと恩物遊びとの連続性について、小笠原はフレーベル教育思想の全体を俯瞰しつつ、発達段階の幅を広げたうえで、以下のように整理している。『フレーベルの遊具(恩物)体系』のIとして『母の歌と愛撫の歌』が位置し、子どもの手足それ自体が『道具』であり、そこから遊戯が開始されるという構図なのである。子どもの手足から出発してIIとして家庭の遊具、幼稚園の遊具、さらに媒介学校(キンダー・シューレ)の遊具が基礎学校遊具に展開し、IIIの子どもの社会における運動遊戯で完結するのである [小笠原 2021: 4-5]。

ここでは、スープが口に入り、舌とのおのどを経由して腹部で消化されるプロセスが描かれている。フレーベルは第4編で身体各部（口・舌・のど・おなか・歯）の名称を強調して表記することで、食べるという行為を成り立たせる各部への注目を意識的に促している。食べたり飲んだりしたものを通過させる器官である喉、固形物を砕いて呑み込みやすくするための歯、中心的な消化器官としての胃（Mäglein）。そして、振り入れられた飲食物の温度や柔らかさなどを察知したり、味蕾をとおして味わったりするための口や舌。これらの身体各部とその連動を取り上げることによって、彼は、第5編「味の歌」で扱われる身体的感覚、つまり味覚へと読み手の興味を誘っている。

『母の歌と愛撫の歌』では、文字の太さないし間隔を際立たせることによって、以下のような二通りの場合に、強調した表記が用いられている（図1）。①「遊戯の歌」の第3編「塔の風見」の「おんどり」、第29編「おおかみといのしし」の「おおかみ」「いのしし」などのように、その作品のテーマとなる単語に注目させている場合。②第16編「親指はすもも」（指に関係する語）、第18編「なつかしいおばあさんとお母さん」（家族の構成員を指す語）などのように、ひとまとまりの単語群に注意を促している場合。

『母の歌と愛撫の歌』での強調した表記は一部の作品に見られるにすぎず、それほど意図的に用いられているとは考えにくい。しかしながら、身体を表す単語群がひときわ多く取り上げられていることは注目に値する。「母の歌と愛撫の歌」第3編「わが子を見て幸福を感じる母」では、母が子どもに話しかけながら愛撫し、身体の様々な部分を愛でる様子が描かれている。この作品では、頭や額から、顔の中心部（ほおと口）へと向かい、身体の末端部（手足）へと視点が移動していく。続く第4編「わが子と遊ぶ母」では、頭（Köpfchen）、額、目、頬、耳、鼻、口、唇、あご、えくぼ、顔、頭頂（Scheitel）、髪、首、うなじ、背中、手の指、腕、胸、心臓、脚（Bein）、足（Fuß）、膝、ふくらはぎ、足の指という25個もの部位が取り上げられる。ここでは、柔らかさ、小ささ、血色のよさなどによって特徴づけられる乳児特有の身体的魅力が、楽しみや喜びといった母親の感情を喚起している。第5編「すくすく育つ子を眺める母」では、よく見える目、歌を聴く耳、花の匂いを嗅ぐ鼻、スープを味わう口、ボールをつかむ手などの感覚器官にとりわけ注意が向けられている。第6編「母の膝に立ち腕に抱かれる時の子と母」でも、「澄んだ目」や「ばらのような唇」といった乳児の身体的特徴が重ねて列挙される⁶。同時に「やわらかい腕を母のうなじに置きなさい」「母の膝に足でしっかりお立ち」「母の誠実な胸にゆっ



図1

くりとお休み」[MK 5-6:23] という部分からも分かるように、母と乳児の身体的な融合による安定や安心感が強調される。さらに、これらの作品では、Öhrchenのような接尾辞-chenを付けた名詞、Fingerleinのような接尾辞-leinを付けた名詞が使用されている。このような縮小形の多用により、子どもの小ささやかわいらしさが言語的にも表現されている。

以上のように『母の歌と愛撫の歌』では、身体にまつわる多くの語彙が繰り返し取り上げられているが、コメニウス (Comenius, J.A.) の『世界図絵』第37章「人間の身体」などのように、事物としての身体と言葉とを一対一で対応させようとする意図は、フレーベルには希薄である [Comenius 1979: 48-49=1995: 100-101]⁷。また、汎愛学舎を開設したバゼドウ (Basedow, J.B.) による銅版画付きの教科書『基礎教科書』⁸ [Basedow 1972: 98-99] や、ペスタロッチ (Pestalozzi, J. H.) とクリュージ (Krüsi, H.) の共著『母の書、あるいは母がその子に観察したり話したりすることを教えるための悟性と言語の訓練』 [Pestalozzi 1803: 1-14]⁹ のように、身体各部へのさらに細かな命名とその枚挙が試みられているわけでもない。むしろ、フレーベルの記述の目的は、身体各部とそのつながりへと関心を向けさせ、「自己の中の生命を——すべての多様性の中で、すべての現象の相違や対立を通して——ひとつの統一したものとして把握し、経験し、知覚」 [MK 61=255] させることにあった。7編からなる「母の歌と愛撫の歌」において描かれる母と子の融合は、この書物全体における基調を決定づける。多様な機能を有する身

⁶ 子どもは「本能 (Triebe) から愛を求め」 [MK 6:24] ており、母はその身体的な魅力に惹きつけられて子どもへと愛を注ぐ。母子間にはこのような自然発生的な相互関係があらかじめ成立しているとフレーベルは考えている。しかし、このような母性の自然主義は、ヨーロッパで18世紀に発見され19世紀に強化された「神話」だという批判もしばしば寄せられる [Badinter 1980]。フレーベルの思想をジェンダーポリティクスの観点から批判的に捉えたものとしては [小玉 2011] が挙げられる。

⁷ フレーベル『母の歌と愛撫の歌』のうち「遊戯の歌」の多くは、「項目名と図絵と子供向けの説明文 (歌詞)」という形式で構成されており、楽譜と大人向けの説明文を除けば、コメニウス『世界図絵』との構造上の類似が見られる。フレーベルがヘルダー (Herder, J.G.) とクラウゼからコメニウスを読むように勧められていたことについては、[鈴木 1974: 171] を参照。フレーベルが身体に関する語彙を強調している点では、「遊戯の歌」第4編「おしまい」にはコメニウス『世界図絵』の影響が残存しているようにも思われる。

ただし、このような構造はコメニウスの同書に特有なものではなく、両者とも、大まかに見れば、近世中期のヨーロッパで流行した「モットー、図像、エピソード」からなるエンブレム・ブックの流れを汲むものとして位置づけられる [北詰 2009: 97]。

⁸ バゼドウの『基礎教科書』(1774年) においては、身体各部の名前を知る学習をつうじて、「自らの身体を言葉によって認識する訓練と……教師の言葉をすぐさま行為に結びつける訓練」 [弘田 2000: 178] が施され、生身の身体とは切り離された、記号としての身体を構築することが目論まれていた。文字と絵で、つまり視覚的に児童に身体に関する知識を得させ、教師の指示に従わせようとする『基礎教科書』とは異なり、「遊戯の歌」では乳幼児は母親の声を介して、つまり聴覚的に身体を意識化し、それにまつわる語彙を口伝で模倣的に身に付ける。

そのような違いがあるにも関わらず、バゼドウとフレーベルには身体訓練の重視という共通項をやはり認めることができる。そもそも『母の歌と愛撫の歌』には、そのドイツ・ロマン主義的な外観とは趣を異にする企図、つまり、「話し方の道具、感覚の道具、四肢の道具」 [小笠原 2021: 141] (1841年10月14日付けテレーゼ・ブリュンツビク宛書簡より) を身に付けさせるという企図があった。よりよい話し方、より鋭く働く感覚、より俊敏に動く四肢の育成が、同書のねらいだったのである。大人向けの訓練 (特に母から子どもへの声のかけ方) と子ども向けの訓練という視点からこの書を捉えるとすれば、バゼドウの延長線上にフレーベルを位置づける見方も可能である。

⁹ フレーベル『母の歌と愛撫の歌』とペスタロッチ/クリュージ『母の書』の関係については、[小笠原 2021: 100-101] を参照。

体各部は、その乳児にとっては全体として、すなわちひとつの身体として経験される。また、乳児が初めて出会う他者である母も、身体的なつながりによる一体化の心地よさや喜びとして現れる。

本節冒頭で取り上げた「遊戯の歌」第4編「おしまい」でも、日常において現れる対立項（存在／不在、過去／現在）は、スープの摂取のような身体を介した経験においては矛盾なく解消されること、身体各部はそれぞれの機能を果たしながらも結びついており全体として統一されていること、が暗示されている。身近な生活経験をつうじて世界の合一的な在りようを予感させようとする意図が、この作品にも認められる。

2-2 フレーベルの感覚観——感覚一般及び視覚、聴覚、触覚

味覚とそれに関わりの深い嗅覚に関する話題に移る前に、フレーベルが感覚一般、味覚・嗅覚以外の個別の感覚様相（視聴覚及び触覚）について、それぞれどのように捉えていたのかを概観しておく。

「遊戯の歌」第27編「壁に写る光の小鳥」で、フレーベルは手足と眼・鼻・耳・口のような感覚器官とを、役割を異にする別々の身体部位として捉えるべきではないと述べる。両者が発達初期の段階において密接に結びつき協働することで、何かに挑戦しようという子どもの意欲が促されたり、子どもの健やかな成長が保障されたりするのである。

さらに、日常的には「五感」と言われるような、様々な個別の感覚様相も、根源的な統一性や非分割性という性質を有している。これは、乳幼児期の初めの段階で、子どもたちが手で触れたものや目で見たものを口でも確かめようとし、身体全体で身の回りの世界を探索しようとする事実からも明らかである。行為という観点から眺めれば、様々な感覚による協働がその遂行には寄与しているのである。

このような外界との統一的な結びつきの中心に位置するのが、視覚である。フレーベルは視覚を「子どもの精神と生命をはぐくみ育てるものの根源であり、魂を育てる時の中心になるもの」[MK 70 : 147]として捉えている¹⁰。ひとが魂として本質を「見る」と、視覚的に「見る」ことの間には類比的な関係がある。「あなたの愛らしい目を見てみると、あなたの魂を見ているようですよ」[MK 70 : 146]という言葉からは、外的対象を「見る」ための器官である眼が、本質を「見る」主体である魂に強く結びつけられていることが分かる。もっとも、眼と魂とを親近的に捉えようとするこのような思考形式は、よく知られるように、プラトンに端を発する西洋哲学史の伝統に深く根付いたものである。プラトンが身体的な機能としての視覚にそれほど信頼を寄せていなかったことは確かだが、アイデアを把握する働きを有する知性を「魂の眼」[ex. Platon 1935 : 202=1976 : 440]と名付けたことから分かるように、彼は「他のあらゆる感覚よりも視覚的なものに特権を与え」[Jay 1993 : 28=2017 : 27]ようとしていた。古代ギリシアにおけるこのような「精神の眼による観想 [speculation] と、身体の中の二つの眼による観察

¹⁰ このような認識は『人間の教育』にもすでに見られる。フレーベルが乳児期を、外部からの諸印象をのみこむ (saugen) 時期として捉え、それを眼 (Augen) と関連づけていたことについては [石村 2020 : 38] を参照。

[observation]] [Jay 1993:29=2017:28] との重ね合わせと、それに依拠した視覚中心主義は、その後、時代の経過とともにいくつかの変化を被りながらも脈々と受け継がれてきたものであり、フレーベルもこの箇所ではそれを反復していると言える。

さて、子どもにとって視覚と同時に必要となるのが、聴覚への刺激である。母親が子どもに語りかける言葉や音声の性質は、子どもに向き合った時の母親としての自然な感情、つまり愛の発露に委ねられている場合には柔らかくなるはずだ、とフレーベルは述べる。同書において、子どもの聴覚に働きかけるのは母親の声に限定されており、それ以外の要素については触れられていない。なお、フレーベルの聴覚観の基礎を形づくっているのは、ペスタロッチであろう。彼は主著『ゲルトルート教育法——わが子を自分で教育しようとする母親への手引書——』で、音声 (Schall)・形・数を捉える能力をあらゆる認識の出発点として措定したうえで、その注意深い育成を母親に呼びかけている [Pestalozzi 1899:77=1987:104]。また、『人間陶冶に関する聴覚の意義』では、母親の声が子どもにどれほど快く響くのかについて語っている [Pestalozzi 1935:319=1960:134]。

フレーベルは、これまで取り上げた視聴覚に関しては、その意義について述べているが、触覚に関する直接的な言及はしていない。ただし、視聴覚及び触覚への刺激は、実は『母の歌と愛撫の歌』の中に構造的に組み込まれている。ウンガー (Unger, F.) による絵は子どもの視覚に、コール (Kohl, R.) が作曲しフレーベルが作詞した楽譜は子どもの聴覚に、それぞれ働きかけることが想定されている。また、母親が愛らしいわが子の身体をなでる時、そこには母子が相互に触れあうことによる直接的な感覚の心地よさが立ち現れる。つまり、視聴覚および触覚は、この書の形式を構成する重要な要素として、すでにたえず機能しているのである。一方、「五感」のうち同書の構造に組み込めないまま除外されているのが、嗅覚と味覚である。フレーベルは、これまでおおむね低級感覚として位置づけられてきたこれらの感覚を、いったいどのように捉えているのだろうか。

3 『母の歌と愛撫の歌』における味覚論

フレーベルが味覚と嗅覚に言及しているのが、「遊戯の歌」第5編「味の歌」¹¹と第39編「においの歌」である。以下、順に見ていくことにする。

3-1 「味わい分ける」ということ——「遊戯の歌」第5編「味の歌」の分析

この作品には挿絵が付いていない。母親への題辞は、以下のような文章で始まる。

「自然は子どもに話しかけます。感覚 (Sinne) をとおしてきわめてはっきりと。お母さん、感覚をとおして子どもに自然を知らせなさい。感覚をとおして内的なもの (Innern) の扉は開きます。しかし、内的なものを光へと引き出すのは精神です。感覚のうちに子どもの魂はひらいています。感覚をきちんと育てなさい。そうすればあなたの子どもが、いつかは多くの苦しみや悩みを避けることができ、それに明るさと意欲と喜びさえも望むことでしょう。自然が私たちに語るすべてをとおして神なる父の愛の跡が見られます。子ど

¹¹ 筆者はこの作品をすでに取り上げたことがある [石村 2020]。本節ではその内容を踏まえつつ、説明が不足している部分を補いながら分析したい。

もの感覚をとにかく早く覚まさなくてはなりません。外的なものを通して内的なものを開くように。子どもはここで早いうちからつながりを予感するでしょう」[MK 11:42]。

ここでは、外的な自然を感じ取る能力としての感覚に焦点が当てられている。自然が子どもの感覚に「話しかける」、つまりそれを触発することをつうじて、子どもの内面は、外的な自然と関わりをもつための準備を整えることができる。ただし、内面を対象へと関わらせ、その対象を認識させるのは、より高次の機能を有する精神の役割であり、感覚がそれを代替することはできない。以上のような認識論に特筆に値する点は見当たらないが、フレーベルはここで感覚を、限定的な役割しか果たさないものとして軽視するのではなく、子どもの魂と環境世界とを結びつける要をなすものとして位置づける。そして母親に向けて、子どもの感覚の育成に配慮するよう呼びかける。子どもの感覚が十分に養われれば、「明るさと意欲と喜び」といったプラスの感情や気分や意志が生み出される、と彼は考えている。感覚をとおしてもたらされる印象が私たちの感情などに影響を与えることは、日常にも広く認められているが、このような「感情」重視の発想には、ロマン主義者としてのフレーベルらしさが色濃く見られる¹²。

次に、自然と神との関係に着目してみよう。フレーベルは、自然には神の痕跡があると述べるが、それはどのような意味であろうか。『人間の教育』の冒頭部にある以下の文章には、その点についてのフレーベルの考えがまとめられている。

「すべてのものは、神的なもの（Göttliches）から、神から、生まれており（hervorgehen）、神的なものが、神が唯一の原因である。神のうちには、あらゆる事物の唯一の根拠がある。すべてのものの中には、神的なものが、神が、安らい、働き、支配している。すべてのものは、神的なものの中に、神のうちに、また、神的なものをとおして、神をとおして安らい、生き、在りつづけている。

あらゆる事物は、神的なものがそのうちに働いていることによるのみ、存在する。

あらゆる事物のうちに働いている神的なものこそ、それらの本質である。

すべてのものの使命および職分は、そのものの本質、したがってそのもののなかにある神的なもの、ひいては神的なものそれ自体を、発展させながら、表現すること、神を、外なるものにおいて、過ぎゆくものを通して、告げ、顕わすことである。」[ME 7:12]

フレーベルによれば、万物は「神／神的なもの」から創造されている。「神的なもの」と神とがしばしば二重に使用されているため、この文章はきわめて読みにくくなっているのだが、その趣意は、万物のうちに「神／神的なもの」が宿っていること、「神／神的なもの」のうちに万物は存在していること、の二つに集約しうる。「神／神的なもの」はあ

¹² ロマン主義を特徴づける「感情」重視の見方は、シュトルム・ウント・ドランク期に遡ることができ。例えば、ゲーテ（Goethe, J.W.v.）の『色彩論』[教示編]「第6編 色彩の感覚的精神的作用」では、フレーベルと同様に、感覚と心情との結びつきが強調されている [Goethe 1989: 206-244=2001: 378-424]。フレーベルが開発した第一恩物（青、緑、黄、橙、赤及び紫の6色で構成されるボール）の配色は、ゲーテによる6色の色彩環と共通していることも指摘されており [倉岡 1999: 130-139]、フレーベルはゲーテ『色彩論』から少なからぬ影響を受けていると考えられる。

らゆる事物に内在するが、そのうちにあらゆる事物を含むものでもあるとする見方、つまりクラウゼ (Krause, K.C.F.) が唱導した万有在神論 (Panentheismus) ——神と自然を相即的とみなすスピノザ (Spinoza, B.) 流の汎神論 (Pantheismus) とは区別される——が、フレーベルの思想の基礎にはある。彼は、「神即自然」という見方を採らないのだが、自然には神の痕跡が残されており、「神的なもの」が息づいているとみなす。

すべてのものは、神の求めに応じて、その「神的なもの」つまり「生き生きと自己創造する自然＝生命」[矢野 2005: 31] を表現し、自らの本質を他なるものへと告知知らせようとする。食料、つまり、人によって食の対象とされる事物についても、それはその生命を表現し、その本質を外部へと示そうとするのである。私たちの感覚が適切に働いていれば、それらの事物が私たちの感覚に与える諸印象にも、私たちは神の痕跡を見出すことができる。「人が感覚そのものを十分に発達させていて、その指図にしたがっていれば、ものごとの内面や本質は、あらかじめその人に告知知らされる」[MK 64: 44]、とフレーベルは述べる。

例えば、すももの甘みは、子どもの舌に心地よさを与える。アーモンドの苦みは、すももの甘味のように本能的には好まれないけれど、苦みが「この世を甘くする」[MK 11: 42] こともあるという摂理を予感することによって、好まれることもある¹³。それらと対照的な食べ物が、熟していないものである。「よくうれていないものは渋みがきつくて／食べると病気になる／だからぼうやはよくうれていないものは／どれも食べません」[MK 11: 42]。「甘み」「苦み」「渋み」などの様々な味わいをもつ食べ物に触れる経験は、子どもの味覚 (Geschmack) を育てる。また、視覚や嗅覚も、その対象が自分にとってプラスの作用を及ぼすのかどうかを判断するための手段となる。例えば、ペラドンナやオニシバリのような有毒植物は、見た目にもどことなく陰があるし、それらが放つ匂いの異様さを嗅覚で察知することができる。味覚、視覚、嗅覚などの「すべての感覚を正しく力強く早くからきめ細やかに発達させることは、人間の幼年時代にも青年時代にも何より重要だ」[MK 64: 45]、とフレーベルは説く。

彼は「自然界においてもものごとの本質が示されるのは、まさに、結合、素材、嗅覚と味覚、形 (Form) と形態 (Gestalt)、大きさと数、音と色、相互の限りないつながりによってのみ」[MK 64: 45]¹⁴である。そして、事物の中にある内面的なものや本質的なものへの探究を通してのみ、私たちの感覚はより豊かに発達する。その探究の過程で、私たちはあるものと別のものとを比較し、両者につながりを見出したり、それらの違いに気づいたりする。視覚で色を判別し、聴覚で音を聞き分け、嗅覚や味覚で匂ったり味わったりし、触覚で対象の質感を確かめる。しかも、形・形態・大きさ・数のような情報はとりわけ、私たちに個別に与えられるのではなく、相互に関わり合いながら、渾然一体となって

¹³ ここではりんごも登場するが、酸味のある食べ物の位置づけは曖昧である。母親は子どもにりんごを摂るよう勧めるが、子どもはそれを口にすると、「紙に火がついたように口をすぼめる」[MK 11: 42] というのが、この作品での展開である。酸味は苦みと異なり、腐敗のシグナルでもある。そのため、それを摂るべきかどうかについて明言を避けているように思われる。

¹⁴ 形態 (Gestalt) と形 (Form) の違いについて、フレーベルは書簡「形と形態の学、その高次の意義と関係における形と形態」(1826年) の中で以下のように記している。「形態 (Gestalt) は内的な生命の表現であり、生き生きと働く内的な力の表現である。それに対して、形 (Form) は同時に外的な力によって、より支配的に条件づけられる」[KS 45]。

現れる。目を凝らすこと、耳を澄ますこと、肌で感じ取ること、そして匂いをかぎ分け味わうこと——多様な感覚を通じた世界との関わりが、ものごとの本質を見極め、私たちの精神世界を深めることに資する、とフレーベルは考えているのである。

「味の歌」解説の最後の部分で彼が強調するのは、感覚の開発が個人の倫理的な発達にも影響を及ぼすという事態である。すでに〔石村 2020：43〕でも述べたように、フレーベルはドイツ語Geschmackの多義性¹⁵——「味」「味覚」「趣味」「審美眼」などを意味する——に注意を促し、「おいしい／まずい」などを識別する味覚の働き、つまり「味わい分ける」能力が、「よい／悪い」といった価値を含む趣味判断を経て、倫理的な意味へと転用されると考える。彼は当時の世相を憂い、家庭や市民社会や職場で営まれる生活においても、様々な悪しき行為が蔓延する社会とみなしていた。その原因は、彼の見立てでは「人間の活動のあらゆる段階で、その生命がまだ成熟に達していないうちに、それを間違って使用したり、事の成り行きに不当に介入したりすること」〔MK 64：46〕にある。ここでは、成熟していない食べ物を口にした時の「渋み」と、未熟な状態でなされた行為や働きかけの過ちが重ね合わされている。子どもに対して「自然の産物への関心を育てようとする時には、成熟から未熟までの発達段階があることに注意させるだけではなく、あらゆるものごとを未熟なままに使用することは自然の摂理に反していること」〔MK 64：46〕を知らせるべきだと、フレーベルは母親たちに助言する。

先述したように、彼の思想の基盤をなすのは、「神的なもの」があらゆる事物を貫いているという原理である。このような神的法則は、人間だけでなく植物にも、また、自然の現象だけでなく人間社会で営まれる社会的な現象にも同時に適用される。人間の発達と植物の生長とのアナロジー、自然現象と社会現象とのアナロジーは、単なるレトリックではなく、彼の象徴主義的な思想の原理に根ざしたものである。「神的顕現としての子ども＝植物論」〔矢野 1995：113〕を唱えるフレーベルの視点に立てば、果実の未熟／成熟を味わい分ける経験は、人間の行為や人間関係の営みの未熟／成熟を見極めたうえで、機が熟すのを待ったり、頃合いを見計らって変化を生じさせたりするための判断力を培うのにも有効なのである。

3-2 二重の愛情による感覚への信頼——「遊戯の歌」第39編「にのいの歌」の分析

「遊戯の歌」第39編「にのいの歌」では、以下のように、花の香りの芳しさが歌詞のテーマとなっている〔MK 44：102〕。

かわいいぼうや
この花をかいでごらん
“ふん ふん！”
ああ いいにおい

¹⁵ ドイツ語のGeschmackだけでなく英語のtasteやフランス語のgoûtも、類似の多義性を持つ。

“ふん ふん！”
どうしてこんなにいいにおい——
ああ きっとぼうやを喜ばせようと
天使が匂わせる
天使は言っている
わたしはぼうやには見えないけれど
この香りがわたしです
ぼうや わたしにもかがせて！
とてもかがずにいられない
“ふん ふん！”

花に宿る天使、つまり花の中にある「神的なもの」を伝える存在が、ここでは登場する。天使が匂わせる香りを嗅ぐことができるのは、また、「この香りがわたしです」という天使の声を聞くことができるのは、子どもやその傍らにいる母親に「神的なもの」が内在しているからである。

そのような「神的なもの」同士の共鳴ともいうべき現象を支える役割を担うのが、感覚、とりわけ嗅覚と味覚である¹⁶。フレーベルは、「感覚の訓練、特に、ひとつの統一したものの両面にすぎない二つの感覚の訓練や純化や向上がとても重要」[MK 73:194]だと述べる。この訓練は「官能的なもの／心的なもの、肉体的なもの／精神的なもの、物質的なもの／霊的なもの、生命的なもの／知的なもの、本能的なもの／道徳的なもの、これらを融合させ、混合させる」[MK 73:194]ことを目的としている。人類の歴史をつうじて、前者は「低きもの」、後者は「高きもの」として位置づけられ、これらの二項対立は、共存しえないもの、よって、後者による前者の支配をつうじて克服されるべきものとして捉えられてきた。それに対してフレーベルは、このような二元論による分裂を調停するための契機を感覚に、しかも低級感覚とみなされてきた嗅覚と味覚に見出す。これらの感覚を訓練によって研ぎ澄ませ洗練させることによって、「低いほうにあるより高いものの根」[MK 73:194]を発見することこそ、様々な矛盾を抱える自己や世界を一つのものとして味わうための方途となる、と彼は考えたのである¹⁷。

それにしても、フレーベルはなぜ、嗅覚や味覚を含めた感覚一般に対してかなりの程度の信頼を寄せることができたのだろうか。一般に、嗅覚や味覚をつうじて得られる快は、私たちが感かせたり溺れさせたりするものとしてたいてい遠ざけられてきた。そのような

¹⁶ このような素朴な感覚への信頼は、フレーベルがイヴェルドンで師事したペスタロッチには見られない傾向である。ペスタロッチは、直観教授の原理の一つに以下の項目を挙げている。「わたしの諸感覚に触れるいっさいの事物の諸現象が、正しい認識に達するための手段となるには、それら事物の現象がわれわれの感覚に対して、それらの変化する状態や性質を示すより以前に、主としてその普遍不動の本質を示さなくてはならない。けれども反対にそれらの諸現象がわれわれの感覚に対して、それらの本質を示すより以前に、主としてその偶然的な諸性質を示すとしたら、その限りそれらは誤謬と錯覚との源泉となる」[Pestalozzi 1899:70=1974:94]。

¹⁷ この記述は、ジンメル (Simmel,G.) が1910年に書いた論文「食事の社会学」の以下の一節を思わせる。「生の諸領域の全体的な序列の中で最も低次にある諸現象の低さは、……まさにそれ自身で、より高きものが成立する基盤でもあるということだ」[Simmel 2001:146=2022:96]。

背景があるにも関わらず、子どもたちが自らの嗅覚や味覚へと意識を向けるようにする感覚教育の意義をフレーベルはなぜ積極的に認めようとするのか。

この問いへの手がかりとなるような言葉が、この作品の終盤部にはある。子どもは以下のように母親へと呼びかける。「ああお母さん、植物や花もあなたのように私たちが愛してくれているのね——！どちらも、正しいものへ導き、悪いものに対して警戒してくれませう」[MK 73:195]。植物や花は、においや形などを通じてその本質を示すことで、人がそれに近づくべきか否か、それがもたらすのは喜びか害悪かなどを伝える。また、例えば、狭い部屋で多くの花の香りを嗅ぐと不快であるように、心地よいものでも過剰であれば有害となることを知らせてくれる。このようにして、自然は私たちに愛を向け、適切なシグナルを発してくれるのだから、そのシグナルを感知するための感覚教育も行われるべきである、とフレーベルは考えている。また、「自然からの愛」だけでなく「母からの愛」も、適切な感覚教育の遂行を保障する重要な要素である。ここで、本節冒頭にある「においの歌」の歌詞に戻ってみよう。この歌詞は「かわいいぼうや この花をかいでござらん」という呼びかけで始まる。母親が子どもに花の匂いを嗅ぐように勧める時、危険をもたらす匂いはあらかじめ遠ざけられている。また「味の歌」でも、母親がすももなどを食べるように促す時、そこで与えられるのは、本来はおいしく食べられるものばかりであり、しかも適量である。「自然からの愛」「母からの愛」という二重の愛情に守られることによって、感覚教育は成立するのである。

さらに、「においの歌」の歌詞は「ぼうや わたしにもかがせて！ とてがかがずにいられない “ふん ふん”」という言葉で締めくくられている。母親が子どもとともに香りを楽しむことで、子どもは感覚のもつ主観性を乗り越え、感覚によって引き起こされる感情を母親と共有することができる。「味の歌」でも事情は同様であり、甘さや渋みといった味わいと、それがもたらす感情を分かち持つことができる。母親と子どもが味覚や嗅覚に与えられる刺激を共有するという構図が成立しているからこそ、これらの「低級感覚」はその低さを昇華させ、楽しみや喜びを喚起するものとして肯定されうるのである¹⁸。

終わりに

本稿では、フレーベルが『人間の教育』ではその感覚観や味覚観を深められていなかったのに対して、『母の歌と愛撫の歌』では味覚や嗅覚を含めた感覚に積極的な意義を見出し、早い時期からの感覚教育を推奨していたことを確認した。様々な事物の本質を適切に見極められるようにするためにも、子どもにとってはとりわけ、味わい分けたり嗅ぎ分けたりする経験が必要である。また、そのような感覚教育の正当性は、万有在神論を基盤とした「自然からの愛」と「母からの愛」という二重の愛情によって担保されていることを明らかにした。さらに、母子間の感覚的刺激的共有をとおして、従来、低級感覚として位置づけられてきた味覚や嗅覚は、フレーベルの思想においては、「低いほうにあるより高いものの根」としての新たな意味を獲得したことも示せた。

¹⁸ ジンメルにおいても、利己的な欲求を充足するものとしての食の営みは、一定の形式を伴った会食の社会性によって高みへともたらされうる。

『人間の教育』『母の歌と愛撫の歌』というフレーベルの二つの代表作における、味覚観ならびにそれに関連する身体観や感覚観については、本稿でかなり詳しく論じることができた。このような考察は、味覚教育の理論と実践を思想的に基礎づけるための予備作業となったであろう。しかし、以上の観点に関して、彼の上記以外の著作や書簡も含めてさらに考究する必要がある。また、コメニウス、ルソー (Rousseau, J.J.)、パウル (Paul, J.)、ペスタロッチなどの教育思想における見解と比較し、フレーベルの味覚論の独自性を明確にすることも、今後の課題としたい。

参考文献

(以下、邦訳のある文献についても、訳文には適宜、変更を加えている。また、括弧内の年号は初出時の年号である。)

* フレーベルの著作の略号は、以下のとおりとする。

KS : *Friedrich Fröbel Ausgewählte Schriften, Bd.1, Kleine Schriften und Briefe von 1809-1851*, hrsg. von E. Hoffmann, Godesberg : Helmut Küpper Vormals Georg Bondi, 1951.

ME: *Friedrich Fröbel Ausgewählte Schriften, Bd.2, Die Menschenerziehung*, hrsg. von E. Hoffmann, 4 Aufl., Stuttgart : Klett-Cotta, 1982. = 荒井武訳『人間の教育 (上)』、岩波書店、1964年。

MK: *Mutter- und Koselieder: Dichtung und Bilder Zur Edlen Pflege Des Kindheitelbens: Ein Familienbuch von Friedrich Fröbel*. Neue Ausg. mit Nachwort von Johannes Prüfer, Blankenburg bei Rudolstadt : E. Wiegandt 1911. = 荘司昌子訳『フレーベル全集第五巻 続 幼稚園教育学／母の歌と愛撫の歌』、玉川大学出版部、1981年 (以下、『全集』と略記)。

MK1 : *Mutter- und Koselieder: wie auch Lieder zu Körper-, Glieder-, Sinnenspiel Zur frühen und einigen Pflege Des Kindheitelbens: Ein Familienbuch von Friedrich Fröbel*. hrsg. Johannes Prüfer, 4. Aufl., Leipzig : E. Wiegandt 1927. (2022年12月11日確認<http://www.froebel.ne.jp/buch/464/46401.html>)

PK : *Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.2., Die Pädagogik des Kindergartens: Gedanken Friedrich Fröbel's über das Spiel und die Spielgegenstände des Kindes*, hrsg. von W. Lange, Biblio Verlag Osnabrück, 1966. = 『全集第4巻 幼稚園教育学』。

Aristotles, 1831 *Aristotelis opera* hrsg. von Bekker, I., Berlin. =2014 中畑正志訳『アリストテレス全集7 魂について、自然学小論集』、岩波書店。

Badinter, E., 1980 *L'amour en plus : Histoire de l'amour maternel (XVIIe-Xxe siècle)*, Paris : Flammarion. = 1998 鈴木晶訳『母性という神話』、筑摩書房。

Basedow, J. B., 1774 (1774) *Elementarwerk mit den Kupfertafeln Chodowieckis u. a.*, Bd.1, hrsg. von T. Fritsch, Hildesheim/New York : Georg Olms.

Comenius, J. A., 1658 (1658) *Orbis sensualium pictus*, 復刻世界の絵本館 (オズボーン・コレクション)、ほるぷ出版。=1995 井ノ口淳三訳『世界図絵』、平凡社。

Goethe, J.W.v., 1810 (1810) *Zur Farbenlehre, Naturwissenschaftliche Schriften Erster Teil, Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche, Bd.16*. hrsg. von E. Beutler, Zürich/Stuttgart: Artemis-Verlag. =2001 木村直司訳『色彩論』、筑摩書房。

Jay, M., 1993 *Downcast eyes: the denigration of vision in twentieth-century French thought*, University of California Press. = 2017 亀井大輔・神田大輔・青柳雅文・佐藤勇一・小林琢自・田邊正俊訳『うつむく眼 二十世紀フランス思想における視覚の失墜』、法政大学出版局。

- Konrad, C., 2006 *Die „Mutter- und Koselieder“ von Friedrich Wilhelm August Fröbel Untersuchungen zur Entstehungs- und Wirkungsgeschichte*, Dissertation der Julius-Maximilians-Universität Würzburg.
- Pestalozzi, J. H., 1899 (1801) *Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, ein Versuch den Müttern Anleitung zu geben, ihre Kinder selbst zu unterrichten in Briefen, Sämtliche Werke* vol.6, Leipzig : Seyffarth. (2022年11月25日確認<https://archive.org/details/smtlicherwerke09pestuoft/page/n5/mode/2up>) =1974 (1960) 長田新訳「ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか——子供をみずからの手で教育しようとする母親への手引書——書簡形式による一つの試み」長田新編『ペスタロッター全集』第8巻。
- Pestalozzi, J. H., 1803 *Buch für Mütter oder Verstandes und Sprachübung die Kinder bemerken und reden zu lehren. Für elementarschulen brauchbarer bearbeitet.* (2022年11月29日確認<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=hvd.32044018961821&view=1up&seq=9>)
- Pestalozzi, J. H., 1935 (1808) *Über den Sinn des Gehörs, in Hinsicht auf Menschenbildung durch Ton und Sprache: Jüngere Fassung (1803/1804), Pestalozzi Sämtliche Werke*, Bd.16, bearbeitet von W. Feilchenfeld und H. Schönebaum, Berlin und Leipzig: Verlag von Walter de Gruyter & Co.. =1974 (1960) 吉本均訳「人間陶冶に関する聴覚の意義」長田新編『ペスタロッター全集』第10巻。
- Platon, *Plato in twelve volumes VI The Republic with an english translation by P. Shorey*, London : William Heinemann LTD. =1976『プラトン全集』第10巻、岩波書店。
- Simmel, G., *Soziologie der Mahlzeit, in: Aufsätze und Abhandlungen 1909-1918*, Bd.1, hrsg. von R. Kramme u. A. Rammstedt: Baden-Baden. =2022 石村秀登、石村華代訳「食事の社会学」、『熊本県立大学共通教育センター紀要』第1号。
- 石井克枝、ジャック・ピユイゼ、坂井信之、田尻泉 2016 『ピユイゼ 子どものための味覚教育 食育入門編』、講談社。
- 石村華代 2020 「フレーベルにおける乳幼児期の食体験の位置づけ」、日本生活体験学習学会誌『生活体験学習研究』第20号、37～44頁。
- 上田遥 2021 『食育の理論と教授法 善き食べ手の探求』、昭和堂。
- 小笠原道雄 2021 『原点資料の解説によるフリードリヒ・フレーベルの研究 国際化の視点からみるフレーベルの思想・制度・実践に関する考察』、福村出版。
- 北詰裕子 2009 「第5講 コメニウス 近代学校の構想」、今井康雄編『教育思想史』、有斐閣アルマ。
- 倉岡正雄 1999 『フレーベル教育思想の研究』、風間書房。
- 小玉亮子 2011 「幼児教育をめぐるポリティクス——国民国家・階層・ジェンダー」、『教育社会学研究』第88集、7～25頁。
- 斎藤新治 2017 「感覚」『教育思想事典 増補改訂版』、勁草書房。
- 鈴木秀勇 1974 「読者へのあいさつの訳注」、コメニウス『大教授学』（世界教育学名著選1、梅根悟責任編集、鈴木秀勇訳）、明治図書。
- 谷川渥 2003 『美学の逆説』、ちくま学芸文庫。
- 弘田陽介 2000 「バゼドウ『基礎教科書』における身体—教育と身体の連動を思想的に問い返す—」、日本教育思想史学会編『近代教育フォーラム』第9号、173～186頁。
- プラート味覚教育センター／中野美季 2012 『味覚の学校』、木楽舎。
- 矢野智司 1995 『子どもという思想』、玉川大学出版部。
- 矢野智司 2005 「幼児教育の独自性はどこにあるのか（4） 生命のフレーベル（上）」、『幼児の教育』第104巻第10号、30～35頁。